

風巻 浩

学校名：神奈川県立麻生高等学校 担当教科：社会科

1. 今回のウガンダ研修における目的やねらい

交流授業を通じて、ウガンダの子どもたちと日本の子どもたちを繋ぐこと。できれば共同で発信すること。「平和」と「希望」について語ること。

ウガンダの普通の人々を固有名詞として日本の子どもたちに語ること。

2. 目的やねらいの達成度

事前に政経の授業で、生徒たちが英語で日本国憲法と9条を紹介するビデオクリップを作成した。これをウガンダの子どもたち（中高生）に見てもらい、それへの応答を求める授業をすることを計画した。協力隊OBの事前研修でのお話では、ウガンダの授業は考えるような授業ではなく、教師の一方的な授業になっている、ということを知られ、ウガンダの子どもたちの意見が聞けるのかどうか不安材料となった。また、戦争、平和という、ウガンダではまだ生々しい材料を授業で使うのはどうか、という意見も協力隊OBから出てきた。さらに、電気施設の期待できない場所で、ビデオクリップを見せることができるかという物理的な問題もあった。不安のなかで交流授業を準備することになった。実は、授業方法、生徒たちへの問いかけをどうするかも、ウガンダについてからも最終決定できずにいた。授業の前の説明の英文も、そんなわけで出来ていなかった。

現地に着き、最初の中学校での交流授業で、T先生が、「この教室に必要なものはなんですか？」という問いを發した。最初の女の子が「知らないということ」と答えた。何という哲学的な答え！こんなにも詩的な発言ができる子どもたちだということが分かった。自分の交流授業でも、問いかけにはきっと答えてくれるだろうという見通しがついた。

交流授業当日、ワグンブリジ中等学校では、担当の時間が少し短くなってしまったので、計画をしていた模造紙を使ったグループ学習は止めにした。最初に日本国憲法9条とアフリカ、ウガンダの歴史との関係を英語で紹介した。その後、麻生高校の生徒が作ったビデオクリップを見せて、「平和な世界をつくるにはどうしたらいいか」「私たちの希望を実現するにはどうしたらいいか」ということについて書いてもらうことにした。ウガンダの子どもたちはよく書いてくれた。最後に2人、ロゼさんという女子生徒と、マトゥア君という男子学生に話をしてもらった。ウガンダの子どもたちの意見は、十分に聞くことができた。次はこれを日本の高校生たちにどう返していくかが課題だ。

3. ウガンダから学んだこと

今回、教師海外研修でウガンダにいけることとなった。現在、研究と実践のフィールドは東北アジア、特に韓国と日本の関係に移っているが、若き教員時代のアフリカへの思いが湧き上がってきた。「開発」や「援助」を、アフリカの「音」「リズム」を、現場で体感することになった。

「音」「リズム」。ンサオ小学校の学校での歓迎演奏など、小学生の音感、リズム感に圧倒された。大きく体や頭を動かし、体全体で16ビートのリズムをとりながら、唄い、演奏し踊る子どもたち。地声の唄も美しい。ビートの基本となる体のリズムは学校では身につかない。地域でいかに伝統的な音楽が演奏され踊られ、その中で子どもたちが成長してきたかを示しているのではないだろうか。

「開発」「援助」。ウガンダの土地は緑に覆われている。大地主制は一般的ではなく、キッチン・ガーデンでバナナ、キャッサバ、サツマイモ、トウモロコシ、野菜類、果物類を栽培していれば、最低限飢えることはない。雑穀や陸稲以外は「除草」の労働もいらぬ。水は井戸等から汲んでくる必要があるが、その主役となる子どもたちには、「最悪の形の児童労働」のような陰りはない。見た限りでは、「女の子」の仕事としてジェンダーに固定された労働にはなっていないようだった。もちろん、このような自給自足の自然経済だけではなく、子どもを学校にいかせるとなると学費がか

かり、電気が引ければ電気代、自転車やピキピキ（バイク）を買い、維持していくとなると、現金収入も必要になってくる。キッチン・ガーデンだけでは現金収入を増収するのはなかなかむずかしい。マラリアなど公衆衛生上の問題点も多い。

ウガンダにとって望ましい「開発」とは何なのだろうか。「開発」とはそもそも何なのだろうか。何か目に見えるものを、数字として具体的な成果が明確なもの、と「開発援助」の現場では考えるのかもしれない。僕のいつも心のなかにある言葉は「開発とは幸せを分かち合うこと」というカマル・フヤルさんというネパールの開発ワーカーの言葉だ。アフリカの農村社会は、「あるものを分け合う人間関係に投資することで非常時のリスクを分散することに意義を見いだす社会」との指摘がある。（杉村和彦『アフリカのいまを知ろう-3 農業と人々の暮らし-』岩波ジュニア新書）その文脈であれば、「幸せを分かち合う」原初的社会的構造を持つアフリカが、その関係を崩さないままに、今ある問題点（公衆衛生、HIV など）を改善していくことが大事なのではないだろうか。携帯電話の電波は電気の届く範囲を超えてウガンダに広まっている。携帯の電波で通信できる電池駆動あるいは手回し蓄電池で駆動できるコンピュータを広げることができれば、イリイチのいうコンヴィヴィアールな世界が実現する可能性がある。実際に、安価で、手回しの発電機を使い、コンピュータ同士が無線でネットワークを作るコンピュータをアフリカなどデジタルデバイドの深刻な地域に普及させていこうという「The One Laptop Per Child」という動きもある。地域に存続している「学び」の伝統を研究し、そこに、このようなデジタル機器をうまく組み合わせることに、日本の開発援助も貢献できるのではないだろうか。

